FD NEWSLETTER

CONTENTS

- 大学教育の質保証と学生移動の促進
  グローバル・メディア・スタディーズ学部
  学部長　各務　洋子
- 平成 28 年度公開授業の実施について
  ■平成 28 年度「公開授業」を参観して
  グローバル・メディア・スタディーズ学部
  准教授　服部　哲
  ■公開授業を終えて
  総合教育研究部准教授　畠山　寛
- 「風通しのよさを求めて」
  総合教育研究部准教授　小黒　昌文
- 平成 28 年度第１回ＦＤ研修会
- ＦＤ推進委員会の今後の活動予定
  ＦＤ研修会開催のお知らせ

大学教育の質保証と学生移動の促進

グローバル・メディア・スタディーズ学部
学部長　各務　洋子

中央教育審議会において、「教育の質保証」が重点課題となって久しい。我が国を支える多様な人材育成のために具体的な取り組みが検討されてきた。その中で「学生移動の促進」がある。これは、それぞれの大学の特徴を活かしながら、各大学の協力によって全国規模での実質的な教育の質保証・向上を達成する方法の一つである。基本的には以下 4 案があげられる。

① 一定数の教員が一定期間大学を移動し、授業を担当する（教員移動による教育水準の実質的保証）。

② 各大学のそれぞれの分野が、当該分野の他大学教員を外部試験委員に委嘱し、成績評価の過程に参加させる（他大学教員参加による成績評価水準の実質化）。

③ 学生が移動し、各大学の特徴を活かした科目を正規の科目として履修する（各大学授業に対する他大学学生による全国的授業評価の成立、教育の質の実質的評価と改善）。

④ 大学間の連携による e-ラーニング等を駆使した遠隔地教育の大規模な実施によって授業の共有を促進する（新時代の教育方法実践による質の実質的確保）。

上記①と②は当該分野の教員の理解と協力に依存すると考えられるが、ここで取り上げたい③の方法は、条件さえ整えば学生は比較的移動がしやすく、実現の可能性が最も高いと評価されている。すでに各地で実施されているコンソーシアムもそれにあたるが、幅広く考えれば、長期留学先での単位履修も含まれるのではないだろうか。更に、昨今の長期に亘る場合の企業インターンシップもまた課外での学習という意味ではカウントできるかもしれない。

日頃の教育現場の実感として言えることは、海外留学を強調している GMS 学部の学生においても、この１～２年前ごろからようやく増加しているという実感をもつのが長期留学希望者である。筆者のゼミでも、長期留学希望者はこれまで１学年に１～２名であったが、今年は 7 名が 2 年の後半、3 年の前半から留学が決定している。短くても半年は出る。また並行して、就職活動絡みの企業インターンシップが講義期間中に続々と実施され、授業の運営には影響がでる。窮余の策で 2 年前から講じた策は、長期留学者には、海外特派員と称して日常生活ばかりでなく、授業内容までも SNS を使って実況レポをさせることだ。今の所、学生にとっては功を奏している。

平成 28 年度公開授業の実施について

平成 28 年度「公開授業」を以下のとおり実施した。「公開授業」は、授業改善のための教員による相互研鑽を目的とし、工夫に富んだ授業に接し、その体験によるさまざまな発見を通して、今後の授業改善のためのヒントを得ることにある。

公開授業は、各学部等のＦＤ推進部会のご協力により、各学部等主体にて実施された。

学部	担当教員	実施日	時限	教場	科目名称
仏教学部	松田　陽志	11/24（木）	3	８－４６８	仏教漢文入門
	飯塚　大展	11/29（火）	2	玉川－３０５	仏教と人間
	池上　光洋	11/30（水）	6	禅研―坐禅堂	法式実習
	徳野　崇行	12/1（木）	3	８－３６２	宗教学概論
文学部	櫻井　陽子	12/7（水）	2	１研－１３４４	国語国文学演習Ⅱ
経済学部	宮田　惟史	11/16（水）	3	１－３０１	経済学史ｂ
	百田　義治	11/17（木）	4	１－４０３	ビジネス事例研究
	山縣　弘志	11/18（金）	2	８－１５１	ロシア・東欧経済論ｂ
	深見　泰孝		3	８－２５７	保険論ｂ
	石川　純治		4	１－３０４	会計情報論ｂ
	吉田　敬一	11/19（土）	1	２研－１０２	中小企業政策論
	井上　智洋	11/21（月）	1	１－３０１	経済政策ｂ
	百田　義治		4	８－２５５	企業経営学ｂ
	吉田　真広	11/22（火）	1	８－２５５	国際金融論ｂ
	明石　英人		2	９－４０５	社会科教育法Ⅵ（公民）
	増田　幹人			８－１５０	人口論ｂ
	村松　幹二		3	８－４６６	制度の経済学
	王　　穎琳			８－３６０	中国経済論ｂ
	小西　宏美		4	８－３６１	グローバル・ファイナンスｂ
	荒木　勝啓	11/24（木）	2	８－３６０	ミクロ経済学
	松井　柳平			８－１５２	ミクロ経済学
	森田　佳宏			８－２５５	会計監査論ｂ
	長山　宗広			８－１５１	地域経済論ｂ
	小栗　崇資	11/25（金）	2	８－３９１	財務会計論ｂ
	曽我　信孝			１－３０１	流通論基礎ｂ
	明石　英人			８－２５５	社会経済学ｂ
	吉田　真広		3	８－１５２	貿易史ｂ
	浅田　進史		4	９－３９１	経済史ｂ
	曽我　信孝	11/26（土）	3	２研－２０３	マーケティングｂ
	長山　宗広	11/28（月）	2	１－２０２	起業論
	溝手　芳計			１－３０１	農業政策ｂ

学部	担当教員	実施日	時限	教場	科目名称
経済学部	矢野　浩一	11/28（月）	3	１－２０１	経済統計ｂ
	鈴木　伸枝	11/29（火）	1	８－２５７	公共経済学ｂ
	岩波　文孝	11/30（水）	1	８－１５０	企業管理論ｂ/経営管理論ｂ
	北口　りえ			９－３９２	税務会計論ｂ
	溝手　芳計		2	１－４０１	経済学入門ｂ
	松田　　健		3	８－１５０	現代企業論ｂ
	渡邉　恵一		4	８－３６０	日本経済史ｂ
	溝手　芳計			１－４０１	経済学入門ｂ
	村松　幹二			８－２５６	契約理論
	小林　正人	12/1（木）	1	８－２５５	日本経済論ｂ
	番場　博之			８－４６５	流通政策ｂ
	鈴木　伸枝			１－３０１	ゲーム理論ｂ
	鄭　　章淵		2	１－４０４	アジア経済論ｂ
	齊藤　　正			１－４０３	現代銀行事情
	中濟　光昭		3	１－２０１	経済情報システム論Ⅱ
	舘　健太郎			９－３９１	産業組織論ｂ
	鄭　　章淵		4	禅研－３０４	経済外国書講読Ⅰb/外国書講読Ⅰb/経済外国書講読Ⅱb/外国書講読Ⅱb
	堀内　健一	12/2（金）	2	８－３６０	経済理論Ａ・資本の原理
	光岡　博美		5	９－３９１	社会政策ｂ
	福島　浩治	12/5（月）	2	９－３９１	国際経済論ｂ
	江口　允崇	12/9（金）	1	１－３０１	財政学ｂ
	福島　浩治		2	２研－２０４	経済外国書講読Ⅰb/外国書講読Ⅰb/経済外国書講読Ⅱb/外国書講読Ⅱb
	西村　　健	12/10（土）	1	８－３６０	ミクロ経済学ｂ
	西村　　健		2	８－３６０	企業経済学ｂ
法学部	富樫　景子	11/25（金）	3	９－３９１	刑法総論
	逢坂　　巌	11/30（水）	3	８－４６７	ジャーナリズム論
経営学部	中野　香織	11/16（水）	3	１－４０１	マーケティング・コミュニケーション論
	中川　淳平	11/25（金）	2	８－４６６	経営学
	飯田　哲夫	111/25（金）	3	２研－２０３	経営数学Ｂ
	明石　博行	11/30（水）	4	８－２５５	経済原論
	岸田　隆行	12/6（火）	2	８－２５５	原価計算論
医療健康科学部	馬込　大貴	11/16（水）	3	９－１７０	画像工学概論Ⅰ
ＧＭＳ学部	ﾘﾝｽｷｰ, ﾏｲｹﾙ	11/18（金）	3	９－１７３	異文化経営論
総合教育研究部	畠山　　寛	11/29（水）	2	１－５１５	ドイツ語ⅠAb（選）
	矢野　秀武	11/30（水）	3	７－５０７	宗教学概説

平成 28 年度「公開授業」を参観して

グローバル・メディア・スタディーズ学部
准教授　服部　哲

平成 28 年 11 月 18 日（金）3 時限（9-173 教場）、グローバル・メディア・スタディーズ学部（以下、GMS 学部）リンスキー・マイケル先生による『異文化経営論』を参観させていただいた。それはたいへん興味深い内容であった。グローバル時代、異文化を理解し、それに応じることは経営だけでなく、どの分野においても極めて重要なことである。今回の授業はそもそも文化とは何かを考えるものであった。国内外で展開されている議論を概観し、目に見える形で表出しているビジュアル化された文化と目に見えないが理解しなければならない文化、異文化を理解するにはこの両側面を理解しなければならないことが解説された。授業はすべて英語で行われた。もちろん、配布される資料やパソコンによって投影されるスライドもすべて英語であるが、分かりやすい丁寧な英語表現が用いられていたため、授業内容も理解しやすかった。「国際社会で通用する実践的な英語力を習得」することをコンセプトの一つとしている GMS 学部で学んでいる学生にとっても、英語で異文化経営について学ぶことは意義深いものである。

さて、当日の授業の実施状況について、まず初めに、前回実施の小テストが返却され、約 30 分間、その解説が行われた。解説では、学生が問題文（もちろん英語）を音読し、別の学生が口頭で回答し、それについて教員がコメントし、正答を黒板に板書した。単純に答え合わせをするのではなく、インタラクティブなやり方で学生に考えさせ、そして正答と解説を加えることによって、学生の理解度や知識の定着度も高まるものと思われる。小テストの解説後、新しい内容が導入された。先述のように、今回のテーマは「What is culture?」であった。授業資料としてスライドを印刷したものが配布され、そのスライドに沿って、「文化とは何か」について解説された。その際も、教員が一方的に話すのではなく、学生に意見を求めるなど、インタラクティブなやり方で授業が進んだ。そのため、学生は受け身ではなく積極的に、かつ適度な緊張感を持って授業を受けることになり、学生の学ぶ意欲を引き出すものと思われる。このような進め方、つまり復習による知識の定着、それを踏まえた新しい内容の導入、そして学生とのインタラクションを筆者自身の授業にも取り入れていきたい。以上、リンスキー先生が行った工夫のすべてを述べているとは思えないが、この場をお借りして、授業参観を受け入れていただいたリンスキー先生に感謝の意を表します。

そして最後に 2 点、気になったことを述べたい。ひとつは教場が 130 周年記念棟の建設現場に隣接しているため「騒音」である。もうひとつは教場の大きさである。受講者数に対して教場が広すぎると感じた。どちらもしかたがないことであるが、学生のことを考えると、少しでも改善されればと思う。

（リンスキー, マイケル先生 公開授業）

公開授業を終えて

総合教育研究部 准教授　畠山　寛

11 月 29 日 2 限に「ドイツ語 IAb（選）」の公開授業を行いました。この授業では 1 年をかけてドイツ語の基本的な文法事項を教えます。公開授業を行ったのは必修の語学の授業ではない選択科目だということもあり、もとより履修者は少ないのですが、当日は欠席者も多く、出席者 9 名と普段よりも少人数の授業となりました。私自身、公開授業を行うのは初めてのため、最初は緊張し、見学にいらした先生方の姿が目に入らないよう、極力教室後方を見ないようにしていましたが、しばらくしたら普段通りに授業を進めることができました。

この日は関係代名詞の説明をいたしました。授業では普段から教科書をなるべく使わないで文法の説明をするようにしています。教科書を見て、一方的に説明するのではなく、ドイツ語を英語や日本語と比較することで、学生自身にドイツ語の文法の特徴を発見してもらいたいからです。そのため、学生には頻繁に発言をしてもらうようにしています。講評をいただいた先生方からも、この点について評価していただけました。その反面、学生の声が小さかったり、応答がスムーズにいかない場面もあり、授業が沈滞気味に感じられたというご指摘もいただきました。ことばはコミュニケーションの道具としても用いられるものですから、私自身ドイツ語という言語を教える授業で、学生とのコミュニケーションを大切にしているだけに、このご指摘は自分の授業のありかたを改めて客観的に見る契機となりました。今後の授業の進め方の参考にさせていただきます。

この文章を書くにあたり、FD の一環として公開授業を行った身として、改めて公開授業の意義について考えていました。幾人かの先生から授業後に講評をいただき、それはそれとして非常に有益ではあったのですが、公開授業は、授業の改善に資するために先生方の講評をいただく、という実際的なことだけのためにあるのではなく、ましてやこのような文章を書くためにあるのでもないことはいうまでもありません。そうではなく、今回公開授業を行い、私にとって大きな意味を持ったのは、授業とは学問と研究の実践の場とし

て、そもそも開かれているものだということが意識できたことです。とかく閉鎖的になりがちな授業空間に、何人もの先生方に来ていただいたということで、授業とは研究と同じく、学問の場として切磋琢磨できる時間と空間であることを感じることができたと言えます。これは私にとっては非常にうれしいものでした。公開授業を行うことで、授業に対する意識が広がる経験を得ることができたからです。この場を借りまして、公開授業に来ていただいた先生方はじめ、FD の取り組みにご尽力されている教職員のみなさまにお礼申し上げます。ありがとうございました。

（畠山　寛 先生 公開授業）

連載企画：よりよい教育のために

「風通しのよさを求めて」

総合教育研究部　准教授　　小黒　昌文

駒澤大学でフランス語を学ぶうえでの幸運のひとつは、南仏の古都エクス＝アン＝プロヴァンスに拠点をおくエクス＝マルセイユ大学との協定にもとづいて、日仏の学生間交流を実現するチャンネルが確立されていることでしょう。毎年３月には４週間の短期語学セミナーが実施され、専門分野の境界を越えて集まった 10 名ほどの学生が穏やかな環境でフランス語を学びます。さらには、１年間の長期留学も可能な仕組みが確保されており、近年では、選抜試験を乗り越えた学生 1～2 名が毎年のように派遣されています。

学習者の総数からすればささやかな数字だとは思います。しかし、出発に向けて準備をすすめるその姿勢や、新たな経験に肉付けされた帰国後の学生生活を見つめていると、留学に参加する学生自身だけでなく、彼らが交わる友人たちや教室全体の雰囲気にもまた、視野の広がりに導かれた知的な風通しのよさが生まれることに気づかされます。教員として前に立つみずからもまた、そうした空気を大切に感じつづけ、また、生み出すことのできる存在でありたいと思う瞬間です。

「何が何でも留学だ」などと押しつけがましく唱える必要はなく、「異文化交流」という、それ自体は豊かであるはずの言葉を不自然に振りかざして、珍妙に美化された未来予想図を描くべきでもないでしょう。ただ、そうした展望が可能性として開かれているという環境自体が、ときには教室に活力をもたらし、ときには辞書のページを孤独にめくるその意識を密やかに支えることがあるということを知っておく必要があるだろうと思います。

留学制度についてもう一点強調しておきたいのは、フランスからもまた、毎年２名の留学生が１年間の予定で来日してくれているという事実です。２年ほどまえになりますが、彼らからの親切な申し出を受け、１年生の授業に参加してもらう機会がありました。かりに簡単な挨拶しかできなかったとしても、あるいは言葉を発することのできないもどかしさを感じるだけであっても良いのです。駅前留学的な安直な発想ではなく、留学生がおなじ学び舎にいて、同じように生活をしていて、ときには自分たちにも興味を持っているのだというその事実を知ることが、どれほどの力になるかを教えられました。

彼らとの交流については、すでに「グローバルサロン」という場を設ける試みが動き出していますが、授業という場においてもそのような機会を作る意義について考え、心地よい風がながれる場の生成へとつながる努力を重ねてゆきたいと思います。

平成 28 年度 第１回ＦＤ研修会

平成 28 年度ＦＤ研修会は、９月 20 日（火）午後４時 20 分から５時 50 分まで中央講堂で行われた。テーマは「教育の質保証にいかに取り組むべきか－３つのポリシーの設定と内部質保証システムの機能化－」で、大学基準協会　事務局長　大学評価・研究部長の工藤潤先生に基調講演をしていただいた。その後、工藤潤先生に本学の桑田禮彰先生（教育研究担当副学長）、猿山義広先生（教務部長）そして多良和己部長（法人企画部）を加えた４名のパネリストにファシリテーターとして青木茂樹先生（ＦＤ小委員会副委員長）を迎えた５名の先生による「本学における教育の質保証の方向性」についてのパネルディスカッションが行われた。

基調講演において工藤潤先生は、『大学が一体となって、内部質保証システムを有機的・効率的に構築していく事が重要性である』という主軸の本、配布資料等を交えながら、大学基準協会が示している内部質保証の方向性について明確なお話しをしてくださった。パネルディスカッションでは、『本学の内部質保証への取り組みは、トップダウンだけでなく、学部・学科、研究科の自治もそこに加えた本学独自の取り組をしていく事が大切である』との意見交換が熱心に行われた。会場からも、本大学が置かれている現状が待ったなしの状況である事がわかったというような事など、多くの質問が出された。参加者102名の盛会となり、本学におけるＦＤ活動の活発化を実感できる研修会であった。

又、今回は初めての試みである「ＦＤ研修会アンケート」調査を行った。アンケート提出者は80名（回収率78.4%）であり、高い回

答率を得た。アンケート結果を見てみると、今回のＦＤ研修会への満足度は「満足」「やや満足」を含め70%、基調講演への満足度は「満足」「やや満足」を含め61%、パネルディスカッションへの満足度も「満足」「やや満足」を含め61%と非常に高い満足度を示していた。この事より、参加者の本研修会テーマへの関心の高さと理解度の高さが垣間見えた。これに対し、研修内容の活用の可能性に関しては、「そう思う」「ややそう思う」を含め41%と低い値を示していた。この質問に対しては「どちらともいえない」という回答が38%と最も多かった。これらのアンケート結果より、今回の研修内容は大学全体で考えていかなければいけない大きなテーマだっただけに、具体的な活用というよりは意識改革をした参加者が多かった事が示唆できた。更に自由記述でも多くの意見が寄せられ、「非常に参考になった」、「学部の3つのポリシーを考える上での一助にしたい」等の意見が目立った。ＦＤ推進委員会としては、今後も「ＦＤ研修会」においてアンケート調査を行い、アンケート結果をＰＤＣＡに活用し、ＦＤ研修会の内部質保証に努めたい。

（ＦＤ推進委員会小委員会委員　熊坂 さつき）

（パネルディスカッションの様子）

ＦＤ推進委員会の今後の活動予定

○平成 28 年度第 4 回（臨時）ＦＤ推進委員会
　平成 29 年 1 月 12 日（木）
○平成 28 年度第 6 回ＦＤ推進委員会小委員会
　平成 29 年 1 月 12 日（木）
○平成 28 年度第 5 回ＦＤ推進委員会
　平成 29 年 3 月 10 日（金）

＊ＦＤ活動についてご意見がありましたら、各学部等のＦＤ推進委員会小委員会委員まで申し出てください。

平成 28 年度 第 2 回ＦＤ研修会のお知らせ

日　時：平成 29 年 2 月 1 日（水）　午後 4 時 20 分～
場　所：中央講堂
テーマ：新しい教育方法と教育活動の質の向上
講　師：山梨大学　森澤正之 先生
※詳細については、後日、ご案内いたします。

編集後記

「忘れられない恋議でした。」昨年 11 月、学内に貼られたこの印象的なポスターのフレーズに目を留めた方も多いのではないだろうか。説明を読むと、「講義をはじめ、演習、実習、実験、実技の内容、教え方などに強く惹かれること。また、切ないまでに深く思いを寄せること」とある。これはもちろん、今年度から始まった「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」の PR ポスターであり、10 月半ばに活動を開始したばかりの学生 FD スタッフの創意によって制作されたものである。わずかな期間にこうしたポスターや PR 動画を完成させ、広報活動を成功させたメンバーたちの熱意には、一教員として大変感銘を受けた。彼らのさらなる活躍に期待したい。

現在、FD 推進委員会小委員会には、4 つのワーキンググループが設置されている。それらはおおよそ、ベスト・ティーチング賞、授業アンケート、FD 研修会、公開授業という 4 つの活動に対応し、それぞれが通年で熱心に活動しているが、今号は第 1 回 FD 研修会と公開授業についての記事を中心にお届けしている。公開授業の実施者として記事を執筆してくださったドイツ語の畠山寛先生の授業には、私も参加させていただいたが、重要事項を何度も学生に言わせてその場で文法事項の定着を図るなど、自分の授業でも採り入れたくなる工夫が数多くあった。先生にはこの場を借りてお礼を申し上げたい。

次号の『FD NEWSLETTER 第 50 号』は、ベスト・ティーチング賞や学生による授業アンケート、第 2 回 FD 研修会の結果報告が中心となる。是非また手に取っていただきたい。

（高　媛、東　辰之介）

【タイトル横の写真は、第 1 回ＦＤ研修会の様子】

ＦＤ NEWSLETTER Dec. 2016 第 49 号
発行日：2016 年 12 月 15 日
発行者：駒澤大学ＦＤ推進委員会
〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1
TEL 03-3418-9444　Fax 03-3418-9114
（事務局：教務部）